

評伝トマス・キャンピオン⁽¹⁾

入江 和生

(1)

トマス・キャンピオン⁽²⁾ (1567-1620) の生涯は生年も没年も 3、4 年ずれるだけでほとんどシェイクスピア(1564-1616) の生涯と重なる。エリザベス朝からジェイムズ朝にかけて活躍した詩人である。

トマス・キャンピオンは医者を職業としていた。彼は自分の肩書としてそれを用いていたし、彼の文学について語るときでも人々は彼をドクター・キャンピオンと呼んだ。文学的には、彼はラテン語詩人として高い評価を受けていた。しかし彼が英語の詩人としても高い評価を得ていたことは文献に明らかである。彼は作曲家でもあって、自作の詩の多くに曲をつけている。他人の詩に曲をつけることはなかったようである。その反対に、彼の詩に他の作曲家が曲をつけることはよくあった。その意味では、彼の意識においては、彼はまず詩人であり、次に作曲家であったということなのだろう。当時における彼の作曲家としての評価は明らかでない。

キャンピオンは仮面劇を 4 つ書いている。そのうちの 3 つは宮廷の重要な慶事に際してホワイトホールで上演するために書かれた。仮面劇作者としても高い地位を与えられていたのだろう。彼の強味は音楽劇とも言える仮面劇の制作に作曲家としても当ることができた点であって、他の誰にも真似のできない極めて「音楽的な」仮面劇を作り出した。

彼はまた理論家でもあって、詩論と音楽論を 1 つずつ書き残している。いずれも高度な技術論であって、啓蒙的な意図を読み取ることができる。

今日の評価では、彼はまず英詩人であり、つぎに仮面劇作者であり、最後に作曲家ということになるが、今後、作曲家としての評価が高まってゆくだろう。彼の音楽は他の誰のものでもない独特の魅力を備えている。彼の音楽的才能は、恐らく、彼自身の意識をはるかに越えるものだっただろう。

(2)

トマス・キャンピオンは、エリザベス女王が即位して 9 年目、スコットランド女王メアリーが叛乱軍に敗れてリーヴェン湖上の城に幽閉された 1567 年の 2 月 12 日にロンドンで生れ、ハウボーンの聖アンドルー教会で洗礼を受けた。

父ジョン・キャンピオンは大法官庁裁判所 (Court of Chancery) の文書係 (cursitor) をしていた。ハウボーンの Chancery Lane に今も Cursitor Street という小路があって、一家はそのあたりに住んでいたと考えられる。キャンピオン一族が 1581 年に処刑されたカトリックの殉教者エドモンド・キャンピオンと血縁関係にあったことの可能性を示唆する

人もいる⁽³⁾。母ルーシーはかつてロージャー・トリッグなる人物の妻であったが、夫の死後、1人娘メアリーを連れて1564年（シェイクスピアが生れた年）にジョンと結婚した。翌年長女ローズが生れ、その2年後にトマスが生れた。母ルーシーが相続した実家の遺産をめぐって父ジョンは幾つかの裁判沙汰に巻き込まれたが、それらが一段落して、生活も安定した1576年（この年はイギリス最初の常設劇場シアター座が開場した年として記憶されている）に、ジョンは死んだ。

母ルーシーは翌1577年にメアリーとローズとトマスを連れてジョンの知人で王室守衛官のオーガスティン・ステュワード（彼の母の親戚からやがて清教徒革命の指導者オリヴァー・クロムウェルが出ることになる）と結婚した。ルーシーにとっては3度目の、ステュワードにとっては最初の結婚だった。そしてその3年後、ルーシーは死んだ。ステュワードとのあいだに子供はなかった。トマスは14歳になっていた。

翌年、オーガスティン・ステュワードは自分の血を分けていない3人の子供を連れて再婚した。相手のアンにはトマスとほぼ同年の連れ子トマスがいた。ここに夫婦と子供4人という、一見平凡で、しかも極めて複雑な家庭が成立したことになる。数カ月後、トマス・チャンピオンはケンブリッジ大学のピーターハウス学寮に送られた。もう1人のトマスもさらに数カ月後に同じ学寮に送られた。ローズは1592年まではステュワード家にいたことが知られているが、その後の消息については分っていない。

2人のトマスがケンブリッジに正式に入学したのかどうかは明らかでない。継父ステュワードの書き残した出費録によれば、2人は別々の勉強部屋を持っていたが、寝室は共有していた。2人は休暇でも家に帰らなかったらしい。

トマス・チャンピオンは、ケンブリッジではおおむね孤独だったようである。多分この頃、同い年のトマス・ナッシュと知り合ったことを除けば、将来につながる交友関係はほとんど持たなかったようである。トマス・キッド、クリストファー・マーロウ、ロバート・グリーンらも同時期にケンブリッジに在学していたが、チャンピオンと知り合っていたという記録はない。なお、ケンブリッジでは音楽を専攻することもできて、チャンピオンのいた時期の前後にジョン・ブル、オーランド・ギボンズらが音楽で学位を得ている。

1584年、トマス・チャンピオンは明らかに学位を取得することなしにケンブリッジを去った。そして1586年4月、ロンドンのグレイ法学院に入学した。

グレイ法学院に入学したのはもちろん法律を勉強するためだが、チャンピオンが弁護士資格を得たとの確証はない。ロンドンにあった4つの法学院はいずれもエリザベス朝演劇の発展に重要な働きをしたが、グレイ法学院はとりわけ演劇熱が高く、1594年にはシェイクスピアの『間違いの喜劇』が上演されることになるが、それに先立つ1588年（イギリスがスペインの無敵艦隊に勝利した年でもある）、ここでバーリー卿ウィリアム・セシルを迎えて在學生、卒業生によって上演された余興芝居（*revels*）にチャンピオンが出演したとの記録がある。この年、チャンピオンは丁年（21歳）に達し、母からの遺産260ポンドを与えられて、経済的なゆとりを得た。法律をどの程度学んだかは疑わしいが、交友関係に

は恵まれて、多くの親友を得た。

その後しばらくのチャンピオンの足取りは定かではない。1591年のフランス内紛に際して、国王アンリ4世を援助するために第2代エセックス伯爵を指揮官として派遣されたイギリス軍に、チャンピオンも参加していただろうとの推測もある。やがてチャンピオンがフランスで医学を修めることになるのはこれが1つのきっかけになったのだらうというのである。

1591年、フランス遠征と前後して、チャンピオンの詩が初めて印刷された（シェイクスピアもこれと前後して作品を書き始めている）。トマス・ニューマンがサー・フィリップ・シドニーの『アストロフェルとステラ』を私家版として出版した際、そこに「他の貴族・紳士たちによる詩とソネット」を付け加えたのだが、そのなかにチャンピオンの詩5編が「コンテンツ」（Content）という筆名で収録されている。そのうちの1編「眠っているご婦人方、お聞きなさい」がチャンピオンの最初の『歌曲集』（いわゆる「ロセターの歌曲集」）に収められていることから、これらが彼の作であると考えられている。これらの詩にはシドニーの影響が認められるので、チャンピオンはシドニーに私淑して詩の書き方を勉強したものであろう。

しかし、これ以外にも、チャンピオンの多くの詩が手書き原稿のままで回覧されていたことは明らかである。1593年、ジョージ・ピールは詩集『ガーター勲章の誉れ』のなかで、チャンピオンに「彫琢された言葉の衣装で奇想を包む君よ」と呼びかけている。また1595年、ウィリアム・コヴェルは『ポリマンテティア』のなかで、多くの詩人を輩出したオックスフォード大学を讃えたついでにケンブリッジ大学にも言及し、その欄外に「甘美なるチャンピオンよ」（‘Sweet Master Campion’）と書き記している。

チャンピオンは1594年に宮廷で上演された仮面劇 *Gesta Grariorum* に「海神賛歌」（‘Hymn in praise of Neptune’）という歌を書いている。作曲は誰のものかわからないがチャンピオンのものであったかもしれない。

1595年、チャンピオンの初めてのまとまった詩集が出版された。しかし、これは英詩ではなくてラテン語による詩集（*Thomae Campiani Poemata*）だった。出版したのは、シェイクスピアの『ヴィーナスとアドーニス』（1592年）や『リュークリース凌辱』（1594年）を出版したリチャード・フィールド。ここでチャンピオンはエドモンド・スペンサーやフランシス・ベーコンを讃えた詩を書いているが、とりわけ作曲家ジョン・ダウランドを熱烈に讃えて、「ダウランドよ、あなたの音楽はみじめな私に理性を忘れさせ、あなたの響かせる和音は愚かな私の心を圧倒する」と呼びかけている⁽⁴⁾。この詩集は好評をもって迎えられ、以後チャンピオンはなによりもラテン詩人として記憶されるようになる。フランシス・ミアーズは1598年の『知恵の宝庫』（これはシェイクスピアを古代ローマのプラウトゥスとセネカを合せたような人だと激賞していることで知られている）のなかで、チャンピオンを「ラテン詩の世界で名声を得、またその世界を進展させた」人として紹介している。またチャールズ・フィッツジェフリーは1601年に発表したラテン語の警句詩のなかで、

チャンピオンをイギリスのラテン語詩人としてはトマス・モアに次ぐ人と評価している。

チャンピオンは 1597 年に出版されたジョン・ダウランドの『第 1 歌曲集』(*First Book of Songs and Aires*) に前記ラテン詩集に載せたダウランド推賞の詩を寄せている。この歌曲集はイギリスのいわゆるリュート・ソングの隆盛の先駆けをなすものであり、またいわばその象徴ともなるものであるが、チャンピオンがどういうかたちであれこの歌曲集の出版に関わりを持ったことは彼にとって重要な意味を持つものであったに違いない。

この翌年の 1598 年にトマス・モーリーとシェイクスピアは連名で課税に抗議している。エリザベス朝後半には声楽の伴奏ではない純粋の器楽曲が多く作曲されるようになるが、この背後には演劇の隆盛があった。いわゆる劇場音楽として器楽曲が作曲されるようになったのである。この時期、シェイクスピアとトマス・モーリーはロンドンで近所づきあいをしていたとされる。

チャンピオンは、1601 年(第 2 代エセックス伯の大逆事件のあった年)に、フィリップ・ロセターと共同で初めての英詩集である『歌曲集』(*A Book of Ayres*)を出した。「リュート、(あるいは) オーファリオン、およびバス・ヴァイオルの伴奏つき」と但し書きがついている。その前半分に載っている 21 篇の詩と音楽がチャンピオンのものである。後半の 21 曲については、音楽はフィリップ・ロセターのものであることが明らかだが、詩についてはそれもチャンピオンの作とする説^⑤とそうでないとする説^⑥の 2 通りがある。フィリップ・ロセターはリュート奏者・作曲家で、この 3 年後の 1604 年には宮廷リュート奏者に任命され、1610 年にはホワイトフライアーズでの少年演劇のマネジメントをするようになる。チャンピオンは死ぬときの遺言で全財産(といっても 22 ポンドにすぎなかったが)を彼に贈っているから、若い時期から最晩年まで、よほど親しい関係が続けたのだろう。なお、この歌曲集は、熱心な音楽の愛好家で多くの若い音楽家(ジョン・ダウランドの息子ロバート・ダウランドを含む)の後援をしていたトマス・モンソンに献呈されている(トマス・モンソンとの関わりは 1613 年にチャンピオンを人生最大の危機に陥れることになる)。

この 1601 年はトマス・モーリーの編纂になるマドリガル集『オリアーナの勝利』(*The Triumphes of Oriana*)が出版された年として記念碑的な意味を持つ。オリアーナとはエリザベス女王のことで、彼女を称えてすべての曲が「麗しきオリアーナよ長命なれ」で終わっている。23 人の作曲家による 25 曲(ギボンズとモーリーのみ 2 曲ずつ)を収めている。なぜこれが記念碑的かと言えば、エリザベス朝を通じて隆盛を誇ってきたポリフォニーであるマドリガルの、これが最後の高まりを示すものだからである。すでにポリフォニーは衰退を運命づけられていた。これ以後はホモフォニーが音楽の主流となってゆく。(ポリフォニーとホモフォニーは必ずしも画然と区別することはできない。マドリガルの最高声部だけを人が歌って他の声部を楽器で演奏することがある。そのときにはポリフォニーともホモフォニーともいえるものになる。)この同じ年に新しいホモフォニーの音楽であるチャンピオンの最初の歌曲集が出版されたことの意義はまことに大きいと言わなければならない。なお、この前年にはダウランドの第 2 の歌曲集(と、ロバート・ジョーンズの歌曲集)

が出版されている。イギリスの音楽界は新旧のスタイルがしのぎをけずって沸々と煮えたぎっていたのである。

また、この 1601 年にはチャンピオンの数少ない文学上の友であるトマス・ナッシュが亡くなっている。

1603 年にエリザベス女王が亡くなって、スコットランドのジェイムズ 6 世がイングランド王位を継承してジェイムズ 1 世となった。

チャンピオンがいつどこでどのようにして音楽の素養を身につけたのかは明らかでない。音楽の素養は当時の紳士が当然備えているべきものの 1 つだったから、当時の多くの人々がそれを身につけたようにして身につけたのかもしれないが、それだけで作曲技法や作曲理論まで修得できるものか、今となっては知るよしもない。彼が在籍した学校、すなわちケンブリッジ大学、グレイ法学院、後述するセン大学のいずれもが音楽の盛んな所だったから、音楽の興味と素養を伸ばすには不自由しなかったとは言えるだろう。彼が親交を結んでいた作曲家は、ジョン・ダウランド、フィリップ・ロセターを始めとして、ロバート・ジョーンズ、リチャード・アリソン、アルフォンソ・フェラボスコ、ジョン・コペラリオ、トマス・リュポ、トマス・ジャイルズなど、当時を代表する作曲家たちだった。但し、当時の作曲家は、例えばジョン・ブルがオルガンやヴァージナルのような鍵盤楽器、またコペラリオがリュートやヴァイオルのような弦楽器の名手であったように、いずれかの楽器を得意とし、作曲家としてよりはむしろ演奏者として収入を得ていたのだが、チャンピオンの場合、彼に得意の楽器があったとは思われない。彼のリュート・ソングのリュート・パートは友人のリュート奏者の誰かが書いたのだろうと考える人もある⁽⁷⁾。

チャンピオンに得意の楽器がなかったにしても、当時の紳士は教養としてヴァイオルを弾いたから、ヴァイオルぐらいは普通に弾いたものと考えられる。リュートも当然弾いただろう。チャンピオンが音楽家としてはアマチュアだったということを今日の標準で考えると誤解のもととなる。当時の音楽家はプロとアマの境界線がはっきりしていなかった。教会のオルガン奏者になるか宮廷音楽家にでもならない限り、あるいはごく下級の音楽師に甘んじない限り、音楽は職業としては成立しなかったのである。詩人ミルトンの同名の父ジョン・ミルトンはチャンピオンと同世代で書記官であったが同時に名の知られた作曲家でもあり、声楽曲や器楽曲を残していて、前記マドリガル集『オリアーナの勝利』の 23 人の作曲家の 1 人でもある。またトバイアス・ヒュームは軍人だったがヴァイオルの演奏家であり、作曲家でもあった。

テューダー朝の音楽はトマス・タリスからその弟子のウィリアム・バードへ、さらにその弟子のトマス・モーリーへと師弟関係を軸に展開した。彼らはいずれも名オルガン奏者であり、宮廷や大教会のオルガニストを務めた。当然、彼らの作品はオルガン曲と宗教曲とが中心だった。しかし 1600 年代に入ると、リュート奏者やヴァイオル奏者が急に増えてくる。これはリュート歌曲が盛んになった結果と考えられる。

エリザベス女王はリュートを巧みに弾いたと伝えられている。即位してまもない頃、ス

コットランドのメアリー女王からの使者が来たとき、その前でリュートを弾いて聞かせて、メアリーはこれほど上手にリュートを弾くかと質問したという⁽⁸⁾。リュートは独奏にも歌の伴奏にも他の楽器とのアンサンブルにも適したものとして当時を代表する楽器であった。シェイクスピアもこの楽器にしばしば言及している。

ヴァイオルはフランス語ではヴィオール、イタリア語ではヴィオラ・ダ・ガンバと言われるもので、ギターやリュートなどの撥弦楽器とルーツを同じくしているが、ヴァイオリンやチェロなどと同じく弓で弾く擦弦楽器である。大小さまざまなものがファミリーを成している。当時の上流家庭には大中小 3 つのヴァイオルが常備され、それを収めた箱はチェスト・オヴ・ヴァイオルズと呼ばれていた。来客があるとそれを出してきてヴァイオルのアンサンブルを楽しむ習わしであった。『十二夜』でサー・トビー・ベルチがサー・アンドルー・エイグチークについて「あいつはヴィオール・ド・ギャンボイズを弾く」⁽⁹⁾とあるのがそれである。シェイクスピアは他の部分ではヴァイオルという名称を用いている。

チャールズ王子はヴァイオルを巧みに弾いたとされる。彼はトマス・リュポ、アルフォンソ・フェラボスコ、ジョン・コペラリオ、オーランド・ギボンズを後援したが、彼らはいずれもヴァイオルやリュートの名手であり、またこれらの楽器のための曲をたくさん書いている。そして彼らはいずれもチャンピオンと親交があった。

チャンピオンの詩を特徴づけるものは第 1 にその題材の幅の広さである。極端に宗教的なものから極端に世俗的、あるいは卑猥なものまでがそこには含まれる。荘重なもの、軽快なもの、憂愁なもの、激しいもの、など、様々である。彼とジョン・ダンとの親交があったという記録はないが、その想像力と受容力の広さ・強さにおいて、ダンと共通のものが感じられる。宗教的なものであれ卑猥なものであれ、チャンピオンは想像力や言語表現力の可能性の限界で遊んでいたのであろう。「それらは昨日書かれたばかりであるかのように瑞々しい。」⁽¹⁰⁾

そして、当然のことながら、それらにつけた曲もまた多様性の極みを示している。このことは、例えばダウランドなどと比較してみれば、チャンピオンがいかに特異な才能に恵まれていたかが明らかとなるだろう。

チャンピオンの歌は **melismatic** であるよりは **syllabic** である⁽¹¹⁾。つまり、1 つの音節に多くの音符を割り当てるのではなく、1 つの音節に 1 つの音符を与えている場合が多い。詩に曲をつけるという原則を重んじた結果と言えるだろう。その意味では、ダウランドなどよりも歌曲における詩の比重はるかに重いのである。

1602 年、チャンピオンの『英詩韻律論』(*Observation in the Art of English Poesie*) が出た。これはラテン詩の韻律の考え方を英詩に当てはめて英詩を整理しなおし、さらにラテン詩にない脚韻という習慣を英詩から排除しようとしたものである。チャンピオンの主眼はラテン詩の韻律を英詩に当てはめるという点にあったのだが、脚韻不要論ばかりが世間の注目を引いて、翌年、詩人サミュエル・ダニエル（作曲家ジョン・ダニエルの兄）の反論『脚韻擁護論』(*A Defence of Rhyme*) が出た。この論争はまったくダニエルの方に分

があって、これ以後チャンピオンの側からの反論はなかったようである。なお、ベン・ジョンソンは『ドラモンドとの対話』(*Conversations of Ben Jonson with William Drummond*, 1711) のなかで「自分はチャンピオンにもダニエルにも反論して『詩論』(*Discourse of Poesy*) を書いた」と述べているが、残念ながらこの『詩論』は今日に伝えられていない。

『英詩韻律論』には韻律各種の実例として 30 編ほどの警句詩が載せられているが、ここには音楽の「束縛」から解き放たれて純粋に言葉の世界に遊ぶチャンピオンの嬉々とした姿を見ることができる。

脚韻の問題は別にして、韻律だけに注目するにしても、一般的に言って、チャンピオンの詩がラテン詩に多くを負っているという印象は薄い。その旋律性やリズム感はあまりにも英語本来のものである。大事なことは、チャンピオンには生れつき音楽の才能があって、その音楽的才能で詩をも書いた、ということなのだろう。「チャンピオンが韻律についてなにを主張しようと、彼の詩を支配していたのは自由な生き生きとしたリズムであって、彼はそれをエリザベス朝音楽から学んだのだ。」⁽¹²⁾

前記ラテン詩集やこれらの警句詩などから察するに、チャンピオンは相当に人の好き嫌いのはっきりした性格だったようだ。ロセター、ナッシュ、ダウランドなどに熱烈な尊敬を捧げる一方で、バーナビ・バーンズやゲイブリエル・ハーヴィーには憎しみと軽蔑をぶつけている。作品のなかでそれをするというのは、例えばベン・ジョンソンの戯曲『へば詩人』(*Poetaster*, 1601) に露骨に見られるように、当時の習慣でもあったのだろう。バーンズはシドニーに私淑し、またハーヴィーはラテン詩に倣って詩を書いた人で、その意味では両者ともチャンピオンと接点を持っていたのだが、気が合わなかったものと思われる。

チャンピオンとシェイクスピアは同時代に生きながらお互いを認識していたという証拠はなににもないが、チャンピオンの脚韻不要論の背後には演劇における無韻詩の隆盛があったのかもしれない。無韻詩はクリストファー・マーロウによって演劇の「言語」として完成され、シェイクスピアによって至高のものとされたのであった。

チャンピオンは 1605 年 2 月 10 日にフランスのセン大学で医師免許を取得している。この大学はイギリスのヘンリー 6 世が 1431 年に創立したもので、多くのイギリス人が医師となるためにここで学んでいる。またこの大学は文学や音楽も盛んだった。チャンピオンにとっては 40 歳を目前にしての医師としての旅立ちであった。なお、1606 年出版のバーナビ・バーンズの著書に寄せた推薦詩でチャンピオンが自らを「医師トマス・チャンピオン」と名乗っているのが、医師として彼の名が記録されている最初のものである（この頃はバーンズとうまくいっていたようだ）。

これ以後数年は、チャンピオンは詩人としてはほとんど活動していない。この頃疫病が流行っていたから、医師として多忙を極めたのだろう。

歴史家ウィリアム・キャムデンは 1605 年に著した『英国史拾遺』のなかで当時を代表する詩人を列挙し、「当然これらの詩人たちを後代の人々は賞賛するであろう」と述べている

が、そのなかにチャンピオンの名も含まれている。なお、詩人たちとは、フィリップ・シドニー、エドモンド・スペンサー、サミュエル・ダニエル、ヒュー・ホランド、ベン・ジョンソン、トマス・チャンピオン、マイケル・ドレイトン、ジョージ・チャップマン、ジョン・マーストン、ウィリアム・シェイクスピア、である。これ以前に発表されたチャンピオンの詩の分量を思えば、これら錚錚たる詩人たちと共に名前を挙げられていることは驚異と言う他ない。

1605 年の 11 月 5 日に有名な「火薬陰謀事件」が起きた。エリザベス朝を通じて弾圧と差別に苦しんできたカトリック教徒が、ジェイムズ 1 世への大きな期待を裏切られて、議会の開会式の行われる建物の地下に積んでおいた火薬を爆発させて王族と議員とを皆殺しにしようとしたものである。未然に発覚してガイ・フォークス他の関係者はすべて処刑された。ベン・ジョンソンは一時カトリックに改宗していたが、このときにはすでに英国国教に復帰していて、事件の捜索に積極的に協力したという。チャンピオンは後の『2 巻の歌曲集』(*Two Books of Ayres*) のなかでこの陰謀が阻止されたことを神に感謝している(第 1 巻第 6 番)。

これ以後カトリック教徒の立場は以前にもまして辛いものとなった。チャンピオンが敬愛してやまないジョン・ダウランドは大陸でカトリックに改宗したためイギリス宮廷で職を得ることができなかった。やがて彼はイギリス国教に復帰するが、それでもイギリス宮廷に職が得られず、デンマーク宮廷のリュート奏者になっている。彼がイギリス宮廷に職を得たのは 1610 年代に入ってからのことであった。

ウィリアム・バードは生涯カトリックの立場を変えず、そのため国教忌避者としてたびたび告発されたが、それでもエリザベス女王からの信任を失うことはなかった。「火薬陰謀事件」が起きた年とその翌々年にも彼はカトリックの典礼音楽を発表しているが、そのゆえに罰せられたという記録はない。トマス・モーリーもカトリックでありながら聖ポール寺院のオルガン奏者を始め数々の要職についた。チャンピオンのパトロンのトマス・モンソンもカトリックだった。チャンピオンもまたカトリック教徒であったと考える人が少なくない。エリザベス朝時代に処刑されたカトリック教徒の数は「血の」メアリー女王の時代に処刑された英国国教徒の数をはるかに越えたとされるが、それでもなおエリザベス朝からジェイムズ朝にかけての政府がカトリックに対して、特に芸術の分野において、ある種の寛容さを失わなかったと見ていいのではあるまいか。

英国国教会は主として政治的な理由から生じたものであって、教義という点ではカトリックとそれほど違わない。純粹に宗教的な理由から生じたルター派やカルヴィン派のプロテスタントとは本質的に異なるのである。従って対カトリック政策は常に政治政策であって、宗教政策ではなかった。宗教という点では、カルヴィン派の流れをくむ清教徒の方がはるかに恐るべき存在だったのである。

1607 年 1 月 6 日、ホワイトホールにて「医師 (Doctor of Phisicke) チャンピオン」の『ヘイ卿の仮面劇』が上演された。ジェイムズ 1 世はスコットランド生れのカーライル伯爵に

して男爵ジェイムズ・ヘイ（あるいはヘイズ）とエドワード・デニー男爵の娘ホノーラとの結婚の取り持ち役を自ら務めた。この結婚によってスコットランドとイングランドとの結束を強化したいという思いがあったようで、それを祝うための仮面劇制作の大任がキャンピオンに回ってきた事情は明らかでないが、キャンピオンは 42 人の歌手・楽師を用いて荘厳な仮面劇を作り、期待に答えた（音楽はトマス・リュボ、トマス・ジャイルズと共作）。

ベン・ジョンソンの仮面劇のいくつかに曲を提供した作曲家アルフォンソ・フェラボスコが 1609 年に『歌曲集』(Ayres) を出版した際、キャンピオンはその冒頭に彼を讃える詩を寄せている。また 1611 年出版の旅行家トマス・コリアットの『雑文集』(*Crudities*) の巻頭には、ベン・ジョンソンやジョン・ダンなどの詩と共に、キャンピオンのラテン語による警句詩が掲載されている。

1611 年、ケンブリッジのある学生が備忘録に書き記した「ロンドンの医師たち」のなかの風刺詩に「やあ、キャンピオン先生、音楽と詩を得意にしておられるようですが、そのお喋りをおやめになるつもりはないんですか？」とあるから、あるいはキャンピオンは饒舌であったのかもしれない。また、この年に出たジョン・デイヴィーズの『愚者への鞭』(*The Scourge of Folly*) の付録の賢者の項のなかで、キャンピオンの詩は音楽的な滑らかさを持ったものとして賞賛されている。

そして 1613 年、キャンピオンの「豊饒の年」を迎える。

この前年の 11 月 6 日にイギリス国民の期待を担っていた皇太子ヘンリーが 18 歳で亡くなり、ドラモンド、フレッチャー、ダン、ハーバートなど多くの詩人によって追悼詩が書かれた（このなかにシェイクスピアの名前がないことが、シェイクスピア不在説の 1 つの論拠になっている）。皇太子ヘンリーは文学・芸術の真の理解者・後援者とみなされていたので、詩人たちは心からの哀悼の意を表したのだった。キャンピオンも『哀悼の歌』(*Songs of Mourning*) を出版した。これには宮廷音楽家でありヘンリーの音楽教師でもあったジョン・コペラリオの曲が付されている。但し、この詩集はキャンピオンのものとしては最上のものではないとされる。テーマが限定されているので、彼の想像力がいつものように奔放に飛翔できなかったのだろう。キャンピオンもそれを意識したか、後の『2 巻の歌曲集』(*Two Books of Ayres*) のなかでもういちどヘンリーの死を悼んでいる（第 1 巻第 21 番）。

この年、キャンピオンの 3 つの仮面劇が上演され、また出版された。まず、『諸侯の仮面劇』(音楽はコペラリオ、リュボと共作)。2 月 14 日に王女エリザベスとパラタイン選帝公フレデリックの結婚式が執り行われ、その日の晩に迎賓館でこの仮面劇が上演された。この結婚にはイギリスとドイツの結びつきといった意味合いもこめられていて、そのことはこの仮面劇の終りの方で登場するシビュレが明言している。101 年後の 1714 年、この新夫婦の孫にあたるジョージ 1 世がドイツからやってきてイギリス王位につくことになるが、シビュレの「予言」が的中したとも考えられる。この結婚式から 2 ヶ月たって新夫婦はドイツへ去ったが、王妃アンはその寂しさを紛らすため、そしてなによりも痛風の治療のために温泉地バースへ赴いた。その途中、レディング近郊のキャヴァシャムのノウルズ卿邸

に 1 泊した。その到着と夕食後と翌日の出発の折々に王妃を慰めるためにチャンピオンが作った仮面劇的な余興芝居が『ノウルズ卿のエンターテインメント』である。これは『諸卿の仮面劇』と合本で出版された。

そして『ソマセット卿の仮面劇』（音楽はジョン・コペラリオ、ニコラス・ラニアーと共作）。ソマセット伯爵とフランセス・ハワードとの結婚を祝って 12 月 26 日にホワイトホールの迎賓館で上演された。この結婚のためにジョン・ダンが「祝婚歌」（‘Epithalamium’）を書き、ベン・ジョンソンも数編の詩を書いて贈った。ベン・ジョンソンは 1606 年にフランセスとその前夫エセックス伯との結婚を祝って仮面劇『ヒュメナイオス』を書いているので、さすがにこの際には仮面劇を彼に書かせるわけにはいかなくて、それでチャンピオンに白羽の矢が立ったということであつたのかもしれない。これはチャンピオンの仮面劇のなかで最も優れた美しい作品であるが、この結婚は有名な「トマス・オーヴァーベリー毒殺事件」の果てに成立したものであり、しかもチャンピオン自身もこの事件に全く無関係ではなかった。

第 3 代エセックス伯爵の妻フランセスはジェイムズ 1 世の同性愛の相手を務めたソマセット伯爵ロバート・カーと恋に落ち、彼と結婚するためにエセックスと離婚する。ソマセット伯爵の保護を受けていた文人トマス・オーヴァーベリーは激しくその結婚に反対したために 2 人の恨みを買ひ、2 人の謀略によってロンドン塔に幽閉され、さらに毒殺されることになる。その一連の奸計のために利用されたのがチャンピオンのパトロンで当時ロンドン塔の役人をしていたトマス・モンソンであつて、チャンピオンも賄賂の受渡しにそうとは知らずに一役買わされたのだつた。しかし結婚後に夫妻の謀略が明るみに出て、フランシス・ベーコンの厳しい審理によってトマス・オーヴァーベリー毒殺事件が立証され、関係者数人が処刑された。夫妻はロンドン塔に監禁され、1622 年までそこに留まることになる。1615 年 10 月 26 日にチャンピオンの審理が行われ、チャンピオンの無罪が確定した。翌年、チャンピオンは、許可を得て、医師として薬を与えるために、ロンドン塔に監禁されていたトマス・モンソンを訪ねている（トマス・モンソンも 1617 年には釈放されることになる）。

チャンピオンがこの事件と無関係であることは当時の審理によって証明されたわけだが、これ以後チャンピオンの仮面劇が書かれなくなったことを思えば、この事件はやはりチャンピオンの詩人・音楽家としての生涯に致命的な影響を及ぼしたと考えざるをえない。

「豊饒の年」の余韻は暗いものになったが、話を 1613 年に戻すと、出版年の明らかでないチャンピオンの『2 巻の歌曲集』（*Two Books of Ayres*）もこの年に出版されたという説がある。2 巻のうち、初めのものは彼のパトロンであるカンバーランド伯爵フランシス・クリフォードに、2 つ目はその息子ヘンリー・クリフォードに献呈されている。2 巻とも、詩も曲もすべてチャンピオンの手になるものである。「第 1 巻」には敬虔な宗教的の歌曲が集められ、「第 2 巻」には恋の歌を、それも極めて世俗的な（時として卑俗な）恋の歌が集められている。この際立った対照に作者としては意図するものがあつたのだろう。また彼の『四

声部対位法論』(*A New Way of Making Fowre Parts in Counterpoint*) もこの年に出版された可能性がある。これはトマス・モーリーの『音楽入門』(*A Plaine and Easy Introduction to Practicall Musicke*, 1597) やコペラリオの『作曲技法』(*Rules how to Compose*, 1606) と並ぶ当時の重要な音楽理論書である。キャンピオンのものはその後長く作曲の教科書とされ、やがて 1660 年にジョン・プレイフォードの『作曲技法入門』(*Introduction to the Skill of Musick*) に収録され、1694 年にヘンリー・パーセルによって改訂されることになる。キャンピオンはこのなかで、それまでのテナー・パートを基本にして他の 3 つの声部を作るやり方を改めてバス・パートを基本にすることを提唱し、そして音楽にほとんど無知な者でもバス・パートさえあれば他の 3 つの声部をほとんど自動的に作曲できるという画期的な方法を披露している。

作曲家トマス・レイヴンズクロフトが 1614 年に出した作曲技法論には、キャンピオンのソネットによる序詞が添えられている。

詩も曲もすべてキャンピオンのものである『第 3 と第 4 の歌曲集』(*The Third and Fourth Booke of Ayres*) も出版年が明らかでないが、悲壮感の漂う『第 3 巻』がトマス・モンソンに献呈され、軽快な『第 4 巻』がその息子ジョン・モンソンに献呈されているところからすれば、トマス・モンソンが釈放されたばかりの 1617 年 (シェイクスピアの死の翌年) に出版されたのだろう。また、この年の 8 月にキャンピオンのパトロンであるカンバーランド伯爵フランシス・クリフォードがブルーアム城でスコットランドから戻ったジェイムズ 1 世を歓迎するために開いた演奏会で歌われた数々の歌曲はジョージ・メイソンとジョン・イアズデンによって作曲され、翌年に出版されたが、その詩を書いたのはキャンピオンだろうと言われている。

1619 年、キャンピオンは 1595 年に出版したラテン詩集を (皇太子 Charles に献呈して) 増補出版する。これが彼の最後の「活動」になった。ラテン詩人として出発した彼は、ラテン詩人として生涯を締めくくったのである。

この詩集の警句詩に、自分は痩せているので、太った友が羨ましい、という内容の 1 節があるのが、彼の外観を記録する唯一のものになっている。

1620 年 3 月 1 日 (メイフラワー号が北米に向けて出航する半年前)、キャンピオンは全財産 22 ポンドを、「もっと多額だったらよかったのだが」と言いながら、フィリップ・ロセターに贈る旨の遺言を口述筆記させ、その日のうちに死んだ。そしてフリート街の聖ダNSTAN 教会墓地⁽¹³⁾に葬られた。葬られたのも同日だったことから、疫病による死だったのではないかと考えられている。ときに 53 歳だった。

生涯を通じて結婚した形跡はない。

注

- (1) 『文學芸術』 共立女子大学総合文化研究所、2001.
- (2) Thomas Campion あるいは Campian。最近では Campion に統一されてきた。
- (3) A.H. Bullen, *Thomas Campion* (London: Sidgwick & Jackson, 1903), p.xxii, fn.
- (4) この詩集の 1619 年の増補版からはこの詩が省かれていることから、A.H. Bullen は、この後チャンピオンとダウランドの仲は疎遠になったのだらうと推測している (*Thomas Campion*, London: Sidgwick & Jackson, 1903, p.xiii)。
- (5) Percival Vivian, *The Works of Thomas Campion* (London: Oxford Univ. Press, 1909), p.xxxviii.
- (6) 例えば Walter R. Davis, *The Works of Thomas Campion* (London: Faber & Faber, 1969)には後半の 21 編は収録されていない。
- (7) Nigel North, *English Ayres by Thomas Campion*, (Brochure to the CD--CKD105: Linn Records, 2000), p.6.
- (8) アンドレ・モロワ著、水野茂夫・小林正訳『英国史』上巻（新潮文庫、新潮社、1958）352 頁。
- (9) シェイクスピア『十二夜』1 幕 3 場 25－26.
- (10) A.H. Bullen, p.xxi.
- (11) Drorothy Linell, *Thomas Campion, Lute songs* (Brochure to the CD--8.553380 NAXOS, 1996), p.3.
- (12) Joan Hart, *Ayres & Observations* (Cheshire: Carcanet Press, 1976), p.13.
- (13) ディケンズの読者なら、『二都物語』において、ジェリー・クランチャーが暴いた墓がこの聖ダンスタン教会墓地であったことを思い出されるだらう。チャンピオンの墓が暴かれなかったことを祈るばかりである。